

小学校低学年児童における構文の理解と産出能力

神 常雄*・野村 妙子**

(2001年11月2日受理)

I 問題と目的

就学前の難聴児では名詞などの単語は比較的良好に獲得できているのに、構文の理解や産出に遅れがあるものが非常に多い。1991年以来、数年間にわたってそういった子どもたちに格助詞を含む簡単な三語一文の指導を行ってきた。週1回の指導でも就学前の2年間で格助詞「が」「を」を用いた構文の理解や産出だけでなく、能動文や授受文の指導も効果的に指導する可能性があることがわかってきている¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。

これまで教育実験を行う中でわれわれがもっとも必要としていたことのの一つが、指導の成果を客観的に判断出来る標準的な学習発達検査である。これまでは、指導してきた中で利用してきた構文を修正してその都度事後テストにしてきたが、それらの検査項目をまとめて体系化し、簡便に診断用の検査として確立することが必要であると考えていた。この検査は、ある構文についての指導終了後に、その事後検査として必要なだけでなく、その時点での課題性を明らかにする意味で、あるいは、指導の効果の一般性を見るためにも（直接指導しなかった構文能力にも指導は効果的かどうかを見る）当該の構文機能だけでなく、他の構文機能についても事前に明らかにしておくための事前検査としても必要だと考えたからである。

これまでわれわれは、就学後の難聴児の構文能力を調査する目的でかなり多くの検査項目を持つ検査を試作した⁵⁾。この検査は実施に時間がかかりすぎ煩雑であるため、より簡便な検査の必要性が痛感させられ、検査項目を整理して、簡易検査を試作することが新たな課題となった。

格助詞を含む構文の理解や産出の発達が、健聴児でどのように経過するのか、われわれは確たるデータを持たない。小寺らの研究⁶⁾によれば、就学前の段階で、Agent-Object-Action 構文（例：「お母さんがバナナをたべる」）は健聴児の3歳代で獲得される。このタイプの構文は、格助詞「が」と「を」を入れ換えると（「お母さんをバナナがたべる」）文章が成立しなかったり（格支配の一義性）、助詞が欠落しても（「お母さんバナナたべる」）意味が十分に伝達される場合が多い（非可逆文）。つまり、Object に対応する語は Agent にはなり得ず、助詞の格支配が一義的に決定している。格支配の一義性が文の構造を把握し易くするのである。これに対して、Agent-Patient-Action 構文（例：「パンダがイヌをあらう」）は6歳前半でも50%強が獲得出来るにすぎない。このタイプの構文は、格助詞を入れ換えると逆の命題を形成したり（「パンダをイヌがあらう」）、助詞の欠落（「パンダイヌあらう」）に

* 岩手大学教育学部

** 葛巻町立葛巻中学校

よって意味の伝達が損なわれる（格助詞の必然性）。つまり、Patient に対応する語が Agent になり得るので、主格と対象格との関係を助詞だけを手がかりにして理解したり言語的に操作しなければならず、助詞そのものの存在や意味を理解していなければならず、幼児にとっては非常に困難な課題となっている（可逆文）。

また、天野⁷⁾は、Agent-Patient-Action 構文タイプの能動文の理解（健聴年中児で平均 72%、年長児で 85%）に比較して、受動文の理解（年中児で 57%、年長児で 70%）がより困難であること、特に受動文における主語 Agent と客語 Patient を混同し、正しく両者を識別することが困難であること（年長児の 53% が達成出来るにすぎない）を示し、就学前のこの時期にはまだ受動文の理解が完全なところには達していないことを示した。さらに、授受文 Agent-Beneficient-Action 構文の理解についても「あげる文」の「もらう文」あるいはその逆の変換課題では年長児において十分な理解に達していないことを示している。

以上見たように、格助詞を含むさまざまな動詞述語構文の獲得は幼児期にはまだ完成するわけではなく、それは就学後のある時期になることが予想される。われわれが取り上げてきたこれらの構文は、健聴児のレベルでいえば標準的にどの程度の課題であるのか、就学後の健聴児の調査が必要であった。

本研究は、これまでに試作した構文検査の項目を整理・簡略化して簡易診断検査として確立し、健聴児の標準的な構文能力の発達レベルを明らかにすることを目的とするものである。

II 方 法

1. 構文能力診断検査の再編

作成にあたって、音声医学会編「言語発達遅滞検査〈試案 2〉」⁸⁾と天野の作成した構文テスト課題⁷⁾を参考にこれまで作成した検査を中心に検討し、以下の 4 種類の検査構文を準備した（図 1 の例を参照）。

- ・ Agent-Object-Action 構文（不可逆文）
- ・ Agent-Patient-Action 構文タイプ I（可逆文）



Agent-Object-Action 構文	Agent-Patient-Action 構文 I
 <p>女の子がリンゴを食べる</p>	 <p>パンダがウサギを洗う ウサギをパンダが洗う</p>
Agent-Patient-Action 構文 II (能動・受動)	Agent-Beneficient-Action 構文 (授受文)
 <p>イヌがネコを追いかける ネコがイヌに追いかけられる</p>	 <p>男の子が女の子にあげる 女の子が男の子からもらう</p>

図 1 検査に使用した構文のタイプの例

表1 構文検査項目と問題例

構文の種類		構文タイプ	出 産	理 解
A・O・A 構文		正語順	お母さんがバナナを食べる (2問)	女の子がリンゴを洗う (1問)
		逆語順		バナナを女の子が洗う (1問)
A・P・A 構文 I		正語順	うさぎがパンダを洗う (1問)	パンダがうさぎを洗う (3問)
		逆語順	犬をパンダが洗う (1問)	犬をパンダが洗う (5問)
A・P・A 構文 II	Active	正語順	ねこがうさぎをたたく (1問)	うさぎがねこをたたく (1問)
		逆語順		うさぎをねこがたたく (1問)
	Passive	正語順	うさぎがねこにたたかれる (1問)	ねこがうさぎにたたかれる (1問)
		逆語順		ねこにうさぎがたたかれる (1問)
A・B・A 構文	あげる	正語順	女の子が男の子に花をあげる (1問)	男の子が女の子に花をあげる (1問)
		逆語順		男の子に女の子が花をあげる (1問)
	もらう	正語順	男の子が女の子から花をもらう (1問)	女の子が男の子から花をもらう (1問)
		逆語順		女の子から男の子が花をもらう (1問)

※産出は絵図版を見て書字にて実施。理解は A-O-A 構文は 1/4、A-P-A 構文 I は 1/6、A-P-A 構文 II と A-B-A 構文は 1/2 選択法で実施。

- ・ Agent-Patient-Action 構文タイプ II (受動文)
- ・ Agent-Beneficient-Action 構文 (授受文)

課題は、構文産出 (8 問) と構文理解 (18 問) からなる (表 1 を参照)。検査は集団で行えるよう、答えを筆記で記入してもらう形式にした。

2. 検査の対象および日時

対象児は、盛岡市内の公立小学校 1 年生 57 名 (男子生徒 31 名, 女子生徒 26 名) と 2 年生 81 名 (男子生徒 44 名, 女子生徒 37 名) の計 138 名である。検査は 1998 年 1 月に、在籍している各クラスで実施した。

3. 実施手続き

各教室で全員に印刷した検査冊子を配布し、検査者の指示にしたがって 1 問ずつ順次いっせいに筆記で解答してもらった。検査者のほか、学級担任、聞こえの教室担当教師および大学生 4 名が同席し、必要に応じて指示や説明の援助を行った。

検査のはじめにまず、検査に登場するキャラクターを、表を見ながら確認する。

構文産出では、図 2 の右のような図版を見せて枠の中のキャラクターのアイコンを見ながら順に文を産出していくことが求められた。一斉テスト形式で実施したので、解答欄に筆記で答えを記入してもらい、全員が記入し終わるのを確認してから次の問題へ進んだ。

構文理解では、問題の構文を読み上げて生徒に聞かせ、その文と意味内容が合致する絵を選択させ、その番号を枠の中に記入させた。図 2 の左のに示すように、自分でも問題文をよく読んでじっくりと答えを考えることが出来る。全員が記入し終わるのを確認してから次の問題へ進んだ。

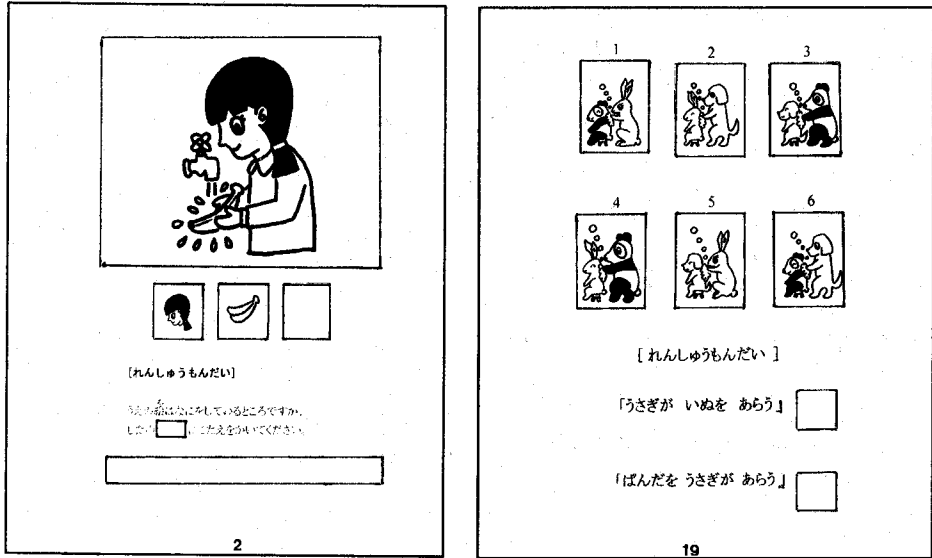


図2 構文産出の問題例(左)と構文理解の問題例(右)

4. 各構文の合格基準

4つのタイプの構文の理解や産出がきちんと習得されているか否かの判断は、以下の基準によった。

<産出課題について>

Agent-Object-Action 構文は2問ともできたときに可とした。

Agent-Patient-Action 構文タイプIについては、正語順の表現(「ウサギが-パンダを-あらう」)と逆語順(「イヌを-パンダが-あらう」)の表現の問題を両方とも正解できたときに可とした。

Agent-Patient-Action 構文タイプIIについては能動文と受動文の両方の表現が、また Agent-Beneficient-Action 構文については「あげる文」と「もらう文」の両方の表現が正解で





Agent-Object-Action	Agent-Patient-Action I
 <p>女の子がリンゴを洗う</p>	 <p>パンダがウサギを洗う ウサギをパンダが洗う</p>
産出2問(2/2) 理解2問(2/2)	産出2問(2/2) 理解8問(7/8)
Agent-Patient-Action II (能動・受動)	Agent-Beneficient-Action (授受文)
 <p>ウサギがネコをたたく ネコがウサギにたたかれる</p>	 <p>男の子が女の子にあげる 女の子が男の子からもらう</p>
産出2問(2/2) 理解4問(4/4)	産出2問(2/2) 理解4問(4/4)

図3 構文検査の各課題の合格基準

きたときに、それぞれ可とした。

<理解課題について>

Agent-Object-Action 構文については、正語順（「女の子が—リンゴを—あらう」）と逆語順（「バナナを—女の子が—あらう」）の両方の問題文で理解できたときに可とした。

Agent-Patient-Action 構文タイプ I は 8 問中 7 問正解のときに可とした。

Agent-Patient-Action 構文タイプ II と Agent-Beneficent-Action 構文はともに 4 問中 4 問正解（能動—受動、あげる—もらうの両方の表現が正解のとき）の場合を可とした。合格基準の一覧を図 3 に示す。

III 結果と考察

1. 検査に使用した各構文の課題の通過率

(1) 構文の産出

① Agent-Object-Action 構文について

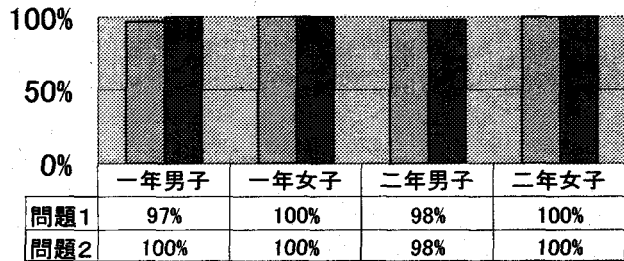
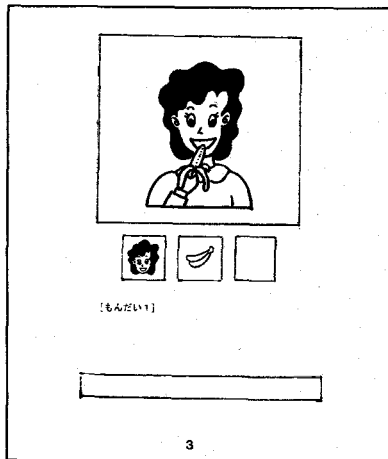


図 4 Agent-Object-Action 構文産出の問題例と通過率

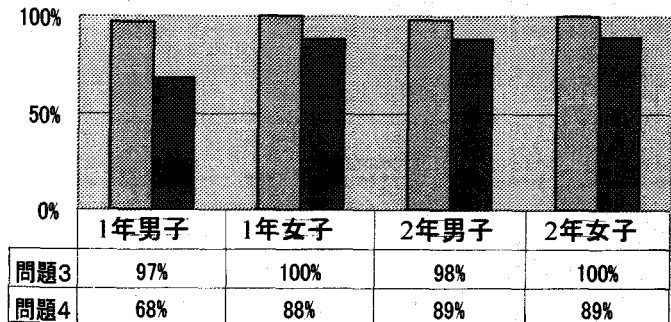
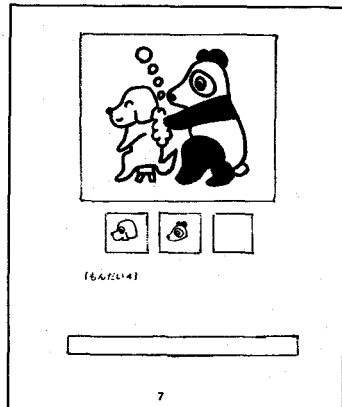


図 5 Agent-Patient-Action 構文 I（逆語順）の問題例と産出通過率

この構文の課題は図4のような問題2問からなる。

図4にみるように、この課題は小学1年ですほぼ全員が可能である。一般的には、三歳代で可能とされ、男子の一部にできない者がいた。要求されている課題の内容が理解できず発達の遅れのある子もクラスの中に含まれていたと思われる。

②Agent-Patient-Action 構文Ⅰについて

図5のような問題2問からなる。指定されたキャラクターから文を産出することが求められる。Agentを文頭にして産出する場合(正語順)には問題がないが、Patientから文をはじめる場合(逆語順)に困難が生じる者が多い。

図5に見るように問題3(正語順)よりも問題4(逆語順)のほうが困難である。「イヌをーパンダがーあろう」のような逆語順の文は、日常会話的には不自然な表現である。特に1年生の男子では、このような不自然な表現で誤る者が多く見られ、助詞方略が完全には身につけていないようである。

③Agent-Patient-Action 構文Ⅱについて

この構文は受身表現が求められるもので、三つの問題からなる。問題5は能動文の正語順の問題である(正解:「ネコがーウサギをーたたく」)。問題6は受動文を要求する課題であるが、能動文の逆語順で産出しても可である(「ウサギがーネコにーたたかれる」あるいは「ウサギをーネコがーたたく」)。この場合は、問題7で受身表現が可能かどうかを調べる。Patientの「ウ

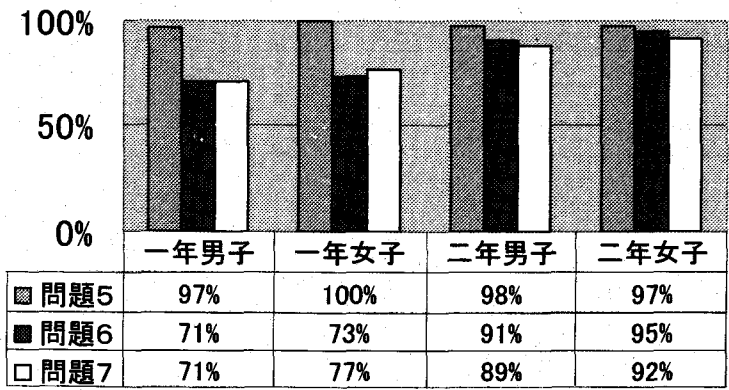
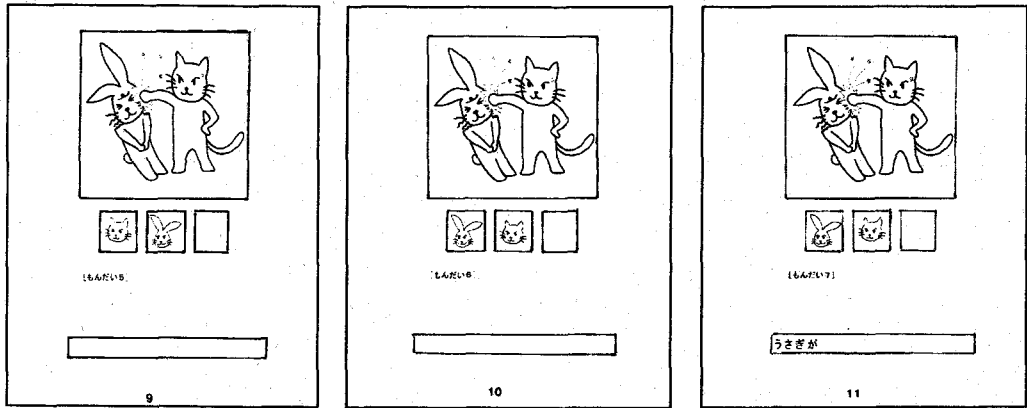


図6 Agent-Patient-Action 構文Ⅱの産出の三つの問題例と産出通過率

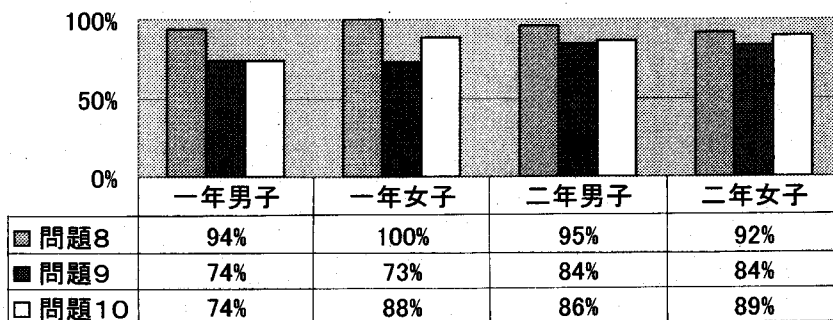
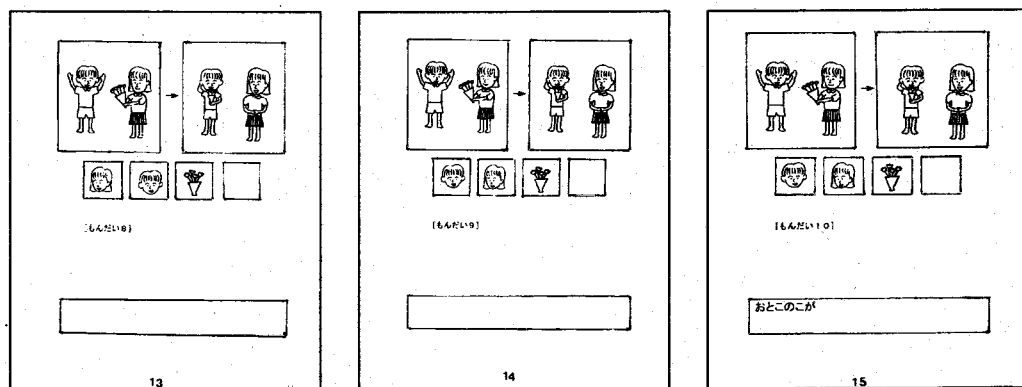


図7 Agent-Beneficiary-Action 構文の産出の三つの問題例と産出通過率

サギ」を主語にして文を産出することを要求する（図6参照）。

受身の表現は1年生の男女とも80%に到達しておらず、まだ子どもによっては少し難しいものである。この問題は2年生で可能になってくるといえよう。

④Agent-Beneficiary-Action 構文について

この構文は授受文の産出に関するものである。図7に示すように、問題8はあげる文（正解：「女の子が-男の子に-花を-あげる」）、問題9が「もらう文」（正解：「男の子が-女の子から-花を-もらう」）である。問題9では、Agent-Patient-Action 構文Ⅱと同様の誤り、つまり Beneficiary を文頭にした「あげる文」の逆語順の文（「男の子に-女の子が-花を-あげる」）を産出してしまふ誤りが多く見られた。そのようなケースでは、「もらう文」が産出出来るかどうかは次の問題10で確認する事になる。つまり、「もらう文」で文を産出しなければならないように「受益者」を主格にして解答欄の始めに書き出しておき、それに続けて文を産出させる。

この問題では、図7に見るように、「あげる」に比べて「もらう」の表現が難しいことがわかる。「あげる文」は1年生でほぼ達成できているが、「もらう文」の表現はそれにやや遅れて発達してくる。

(2) 構文の理解

①Agent-Object-Action 構文について

Agent-Object-Action 構文の理解に関しては1年生で100%可能であった。

②Agent-Patient-Action 構文Ⅰについて

この問題は正語順の問題3問と逆語順の問題5問からなっている。図8に問題例を示す。図

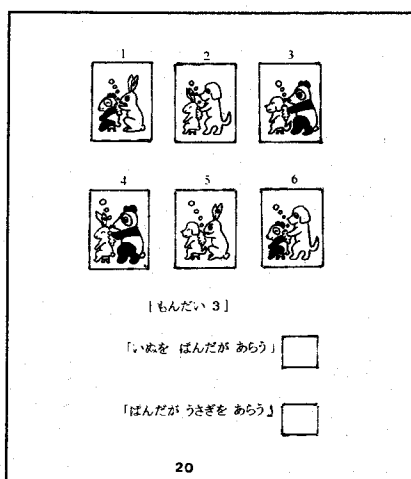


図8 Agent-Patient-Action 構文Ⅰの問題例（正語順と逆語順）

9に見るように、正語順では構文の理解で誤る者はほとんどいない。しかし、図10に見るように、逆語順で特に1年生の男子で誤答が目立つ。文頭にくる語を Agent として主語に見立ててしまう「語順方略」で理解する傾向の現れである。

③Agent-Patient-Action 構文Ⅱについて

この問題は、問題7（能動文の正語順）、問題8（能動文の逆語順）、問題9（受動文の正語順）、

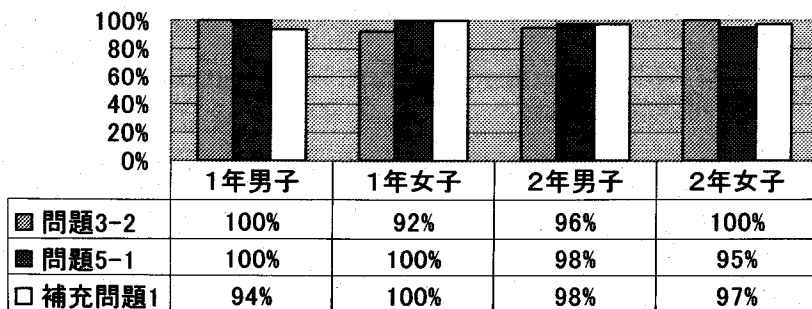


図9 Agent-Patient-Action 構文タイプⅠ（正語順）理解の通過率

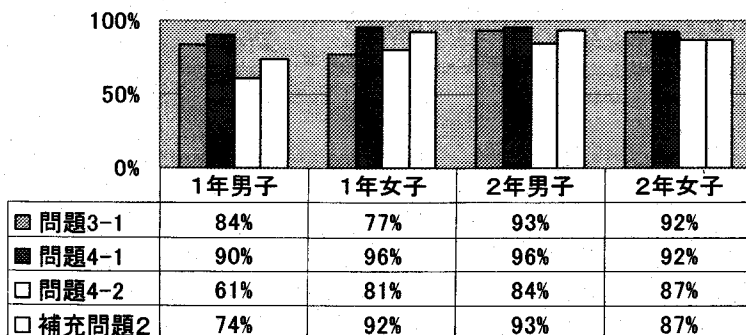


図10 Agent-Patient-Action 構文タイプⅡ（逆語順）理解の通過率

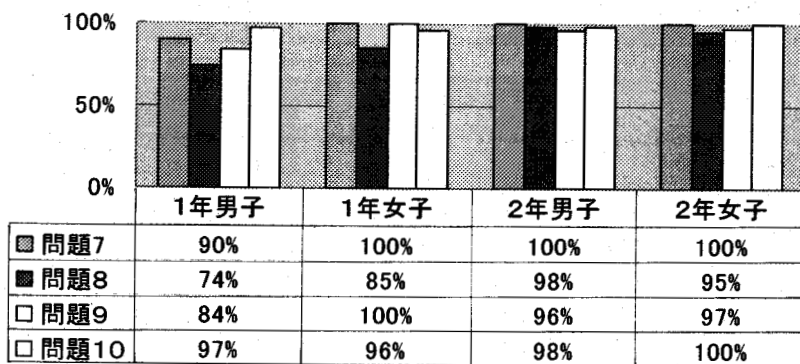
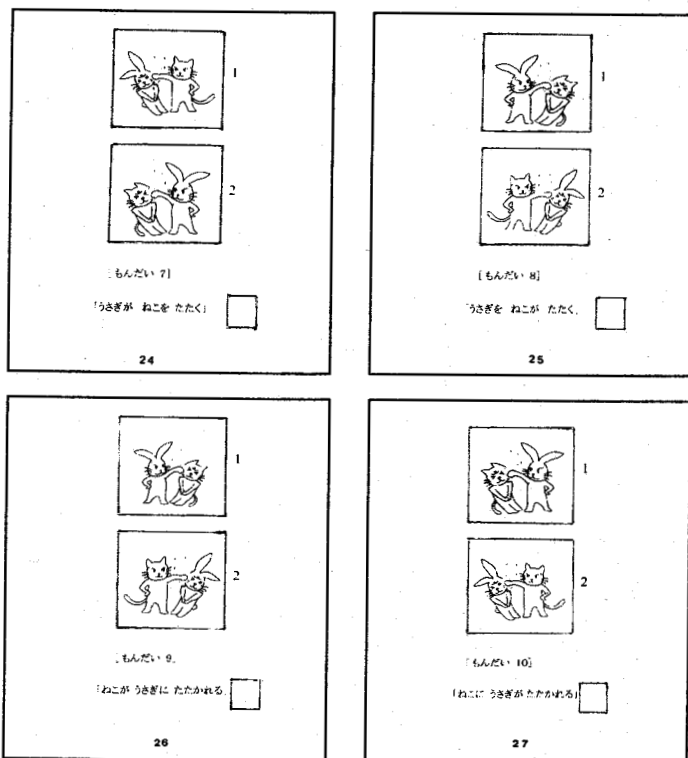


図11 Agent-Patient-Action 構文Ⅱの問題例と理解の通過率

問題10(受動文の逆語順)である。図11の結果から、問題8と問題9が1年生の男子で通過率が低い。特に問題8が低く、やはり不自然な表現に対して語順方略で理解する傾向が強く現れたものと考えられる。

④Agent-Beneficient-Action 構文について

授受文の問題は、問題11(あげるの正語順)、問題12(あげるの逆語順)、問題13(もらうの逆語順)、問題14(もらうの正語順)の構成となっている。図12の結果に見られるように、問題12と問題13の逆語順の構文の理解が1年生の男子で悪い。

Figure 12 shows four panels of Agent-Beneficiary-Action (ABA) problems. Each panel consists of two scenes (1 and 2) with characters and arrows indicating actions. Below each scene is a text prompt and a blank box for the answer.

- Panel 28:** Scene 1: A boy gives a flower to a girl. Scene 2: A girl gives a flower to a boy. Prompt: 「おとこのこが おんなのこに はなを あげる」 (The boy gives a flower to the girl). Answer box:
- Panel 29:** Scene 1: A girl gives a flower to a boy. Scene 2: A boy gives a flower to a girl. Prompt: 「おんなのこから おとこのこが はなを もらう」 (The girl gives a flower to the boy). Answer box:
- Panel 30:** Scene 1: A boy gives a flower to a girl. Scene 2: A girl gives a flower to a boy. Prompt: 「おとこのこに おんなのこが はなを あげる」 (The girl gives a flower to the boy). Answer box:
- Panel 31:** Scene 1: A girl gives a flower to a boy. Scene 2: A boy gives a flower to a girl. Prompt: 「おんなのこが おとこのこから はなを もらう」 (The girl gives a flower to the boy). Answer box:

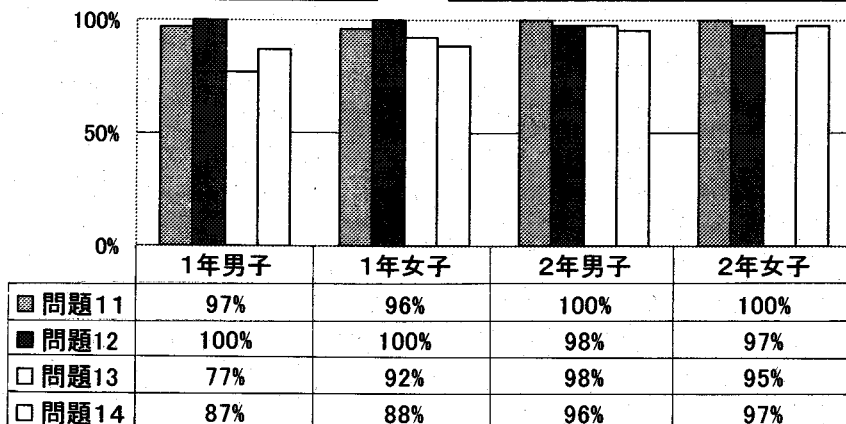


図 12 Agent-Beneficiary-Action 構文理解の問題例と理解の通過率

2. 学年・男女別に見た平均得点

(1) 構文産出得点について

図 13 の結果が示すように、構文産出は 10 点満点で一人平均 8 点以上の成績である。1 年男

(単位: 得点)

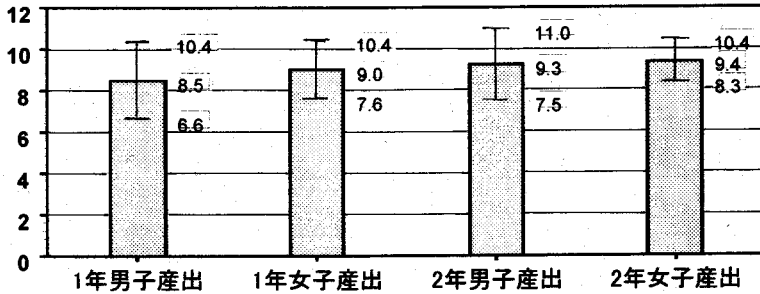


図 13 グループ別構文産出個人平均得点

子と2年男子 ($t_0 = -1.7945, P < 0.05$), 2年女子 ($t_0 = -2.4333, P < 0.01$) との間で, 平均得点に統計的に有意な差があった。この種の課題は, 小学2年生でようやく安定して構文を産出出来るようになることがわかる。

(2) 構文理解の個人得点の傾向について

図 14 に見るように, 20 点満点で 1 年男子の平均が 15.6 点, 1 年女子からほぼ 17 点である。1 年男子と 1 年女子 ($t_0 = -1.9133, P < 0.05$), 2 年男子 ($t_0 = -3.0455, P < 0.01$), 2 年女子 ($t_0 = -2.018, P < 0.01$) との間で, 平均得点に有意な差があるといえる。

(3) 構文検査の個人総得点の傾向について

(単位: 得点)

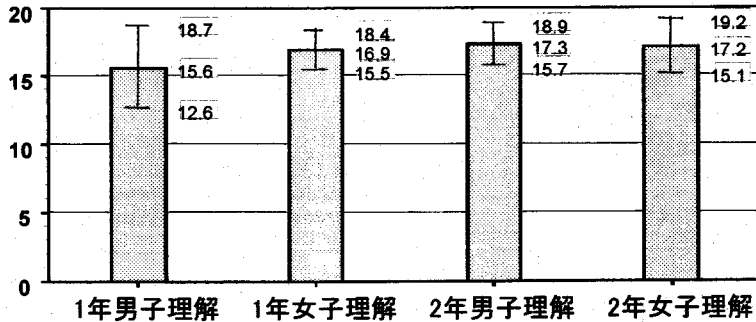


図 14 グループ別構文理解個人平均得点

(単位: 得点)

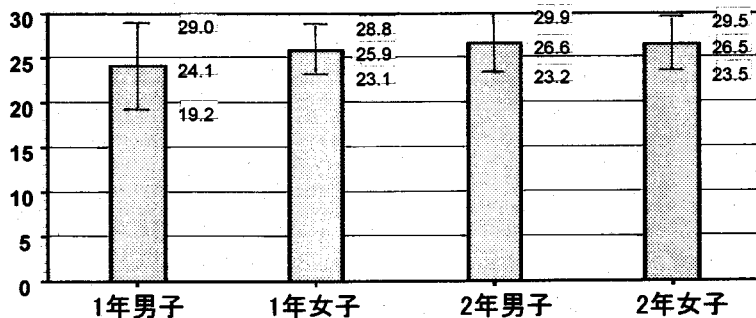


図 15 グループ別構文検査個人平均総得点

個人の総得点の平均は、図 15 に示すとおりである。1 年男子と 2 年男子 ($t_0 = -2.5245$, $P < 0.01$), 2 年女子 ($t_0 = -2.3927$, $P < 0.01$) で、それぞれの間で得点に有意な差があるといえる。

3. 合格基準で判定した普通児の構文能力の発達の程度

(1) 構文産出

① Agent-Object-Action 構文が合格基準に達している者

合格基準に達している者（産出課題の問題 1 と 2 が可能）はほぼ 100%である（図 16）。

② Agent-Patient-Action 構文 I が合格基準に達している者

この課題は、1 年男子で 30%以上の者が合格基準（正語順の問題 3 と逆語順の問題 4 がともに正解）に達していない。1 年生にとっては Agent-Object-Action 構文と比べればより困難な課題といえそうである。逆語順に戸惑う子が多かった（図 17）。

③ Agent-Patient-Action 構文 II が達成基準に達している者

1 年では全体に成績が悪く、2 年生でこの構文を正しく遂行出来る者の人数が 90%近くに達する（図 18）。1 年男子と 2 年男子の間に統計的に有意な差があるといえる結果が出た ($\chi^2 = 5.081571$, $\chi^2_{.05} = 3.841455$)。

④ Agent-Beneficient-Action 構文が達成基準に達している者

1 年男子で基準に達している者の割合がやや少ないものの、統計的には差がみられなかつ

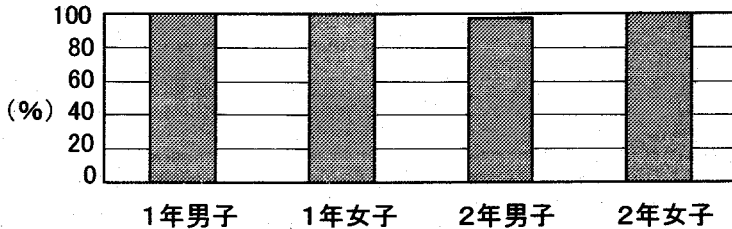


図 16 Agent-Object-Action 構文の産出の可能な者

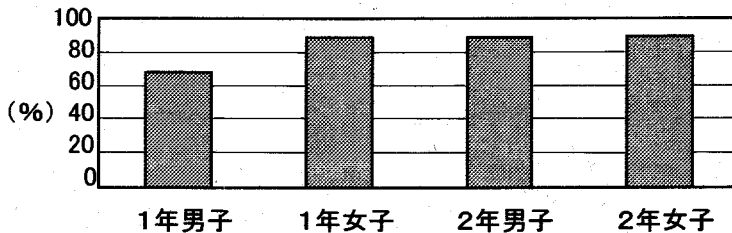


図 17 Agent-Patient-Action 構文 I の産出可能な者

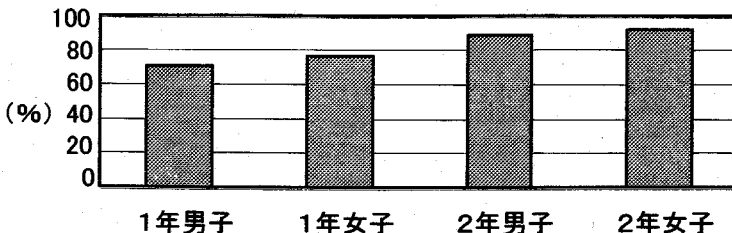


図 18 Agent-Patient-Action 構文 II の産出可能な者

た (図 19)。

(2) 構文理解

① Agent-Object-Action 構文が達成基準に達している者

この課題は 1 年生から産出課題と同様に可能である (図 20)。

② Agent-Patient-Action 構文 I が達成基準に達している者

1 年男子でこの課題ができない者が多い (図 21)。1 年男子と 2 年男子で統計的に有意な差があるといえる結果が出た ($\chi^2=6.670446$, $\chi^2_{0.05}=3.841455$)。

③ Agent-Patient-Action 構文 II が達成基準に達している者

この課題構文の理解が、1 年男子にとって最も困難な課題であった (図 22)。1 年男子と 2 年男子で統計的に有意な差があるといえる結果が出た ($\chi^2=6.905376$, $\chi^2_{0.05}=3.841455$)。

④ Agent-Beneficient-Action 構文が達成基準に達している者

統計的には有意差が認められなかったが、1 年男子でのみ達成基準に達した者の人数の割合が 80%以下であることが図 23 からわかる。

4. 構文の産出における誤り

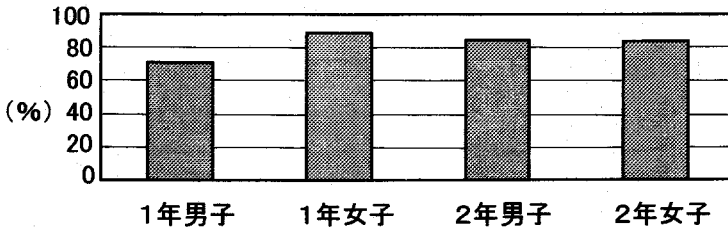


図 19 Agent-Beneficient-Action 構文の産出可能な者

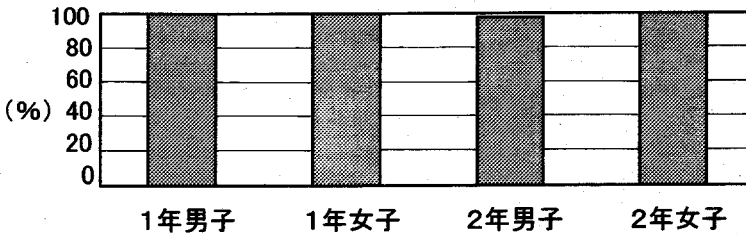


図 20 Agent-Object-Action 構文理解の可能な者

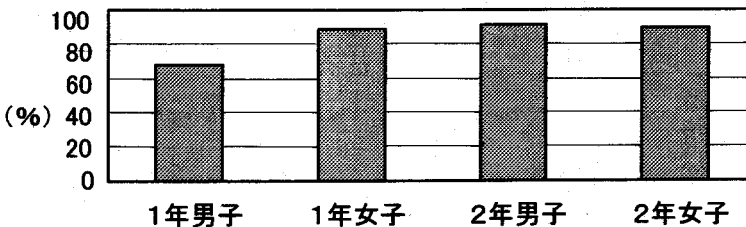


図 21 Agent-Patient-Action 構文 I 理解の可能な者

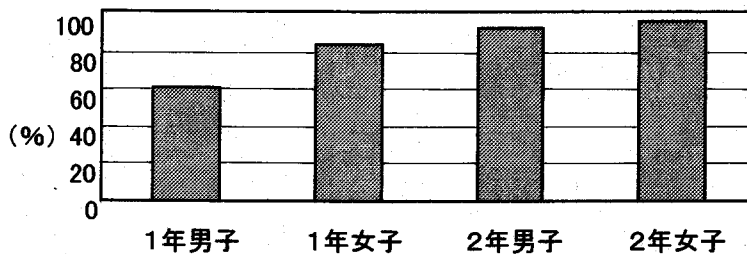


図 22 Agent-Patient-Action 構文Ⅱ理解可能な者

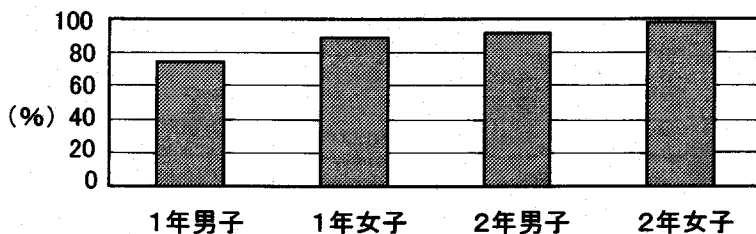


図 23 Agent-Beneficient-Action 構文理解可能な者

(1) Agent-Object-Action 構文

構文的には誤る子はほとんどなかったが、書字法の上での誤り、特に格助詞「を」を「お」と書いてしまう誤りが何人かに見られた。

(2) Agent-Patient-Action 構文 I

誤りの大半は、逆語順の産出課題で正語順に産出する「語順方略的」誤りが多く見られた。

(3) Agent-Patient-Action 構文 II

受動の表現がどうしてもできず、能動文の逆語表現でしか産出できない誤りである。

(4) Agent-Beneficient-Action 構文

もらう文をあげる文で産出してしまう誤りが多く、あげるともらうが未分化な印象を強く持った。

5. 理解テストに見られた誤り

(1) Agent-Object-Action 構文

1年男子でもほとんど誤りは認められず、よく理解できていた。

(2) Agent-Patient-Action 構文 I

正語順の問題はほとんど可能だが、逆語順の問題でほとんどの者が「語順方略的」誤りをおかしていた(例えば、「イヌをーパンダがーあらう」の問題でイヌがパンダを洗っている絵を選択してしまう)。これは明らかに、文頭の語を主語にし、Agentとしてしまった誤りである。この誤りがもっとも根強く子どもたちの構文理解に影響を及ぼしている。一般的には日常の言語活動の中ではめったに経験することがない表現で、子どもにとって非常に不自然な言い回しである。しかし、助詞を構文の意味理解のための手がかりとする「助詞方略」が使用出来るようになった子どもには、可能な課題である。つまり、この種の構文を理解出来るか否かが、助詞の発達の重要な目安になると考えることが出来るかもしれない。

(3) Agent-Patient-Action 構文Ⅱ

問題 9, 10 の受動文の理解が特に困難であるというわけではない。二択の問題なので、4 問全出来たときに能動受動の理解が区別出来ると考えられよう。

(4) Agent-Beneficient-Action 構文

この構文では、あげるともらうの未分化な者が見られた。「あげる文」の理解はよく出来るが、「もらう文」の問題で 1 年男子の多くのものが混乱していた。二者択一の問題なので、4 問全部できたときに授受文の理解が可能であるとみなすのが妥当であろう。

6. テスト図版・テスト方法の問題点

今回の検査の実施は、一斉検査の形式をとったために、筆記で解答してもらった。どの学年でもほぼ 40 分以内で終了した。検査の指示説明をよく理解できないために説明に時間がかかった子がいたために、クラス全体として時間がかかってしまったが、個別テスト形式ならば実施には 20 分程度の時間で検査はすむ。

この筆記の方法で課題を答えるのには、1 年生ではまだ困難をきたした者も少なからずいた。また、クラスの中には一般的に課題の理解に困難な者もいたかもしれない。そのことを考慮すれば、この構文検査は遅くとも小学校 2 年生でクリア出来る水準の課題であるといえよう。もしもこの年齢の子どもで検査に躓く傾向が強く見られた場合は、言語的、知的発達の点から、より詳細な検査を必要とする者と考えてよいかもしれない。

IV 結 論

健聴の小学校 1 年生と 2 年生に自作の構文能力検査を実施し、以下の結論を得た。

1. 今回実施した構文検査は小学校 1 年の男子ではまだ少し難しいものもいたが、遅くとも 2 年生になれば男女とも十分達成可能であった。女子に比較して男子の成績が低い傾向にあるが、統計的には有意ではなかった。
2. 筆記で実施することについては、最年少の学年では個別に口頭で実施するなど、考慮する必要があるかもしれない。
3. Agent-Object-Action 構文は他の構文よりも明らかに容易であった。しかし、その他の諸構文間には明らかな難易差を認めなかった。
4. 本検査は比較的短時間で実施することが可能であった。このことから本検査を利用することにより、難聴児の構文能力を短時間で評価・スクリーニングすることが可能となると思われる。

文 献

- 1) 神常雄・武田篤「高度難聴幼児における統辞機能形成の試み」岩手大学教育学部研究年報、第 53 巻、第 2 号、pp. 75-89, 1993.
- 2) 神常雄・武田篤「難聴児における統語機能形成の試み」障害者問題研究、第 23 巻、第 4 号、pp. 331-339, 1996.
- 3) 神常雄・及川絵美子・武田篤・永戸千賀「難聴児の構文能力—就学前児に対する授受文の指

- 導」日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, pp. 92-93, 1998.
- 4) 神常雄・及川絵美子・武田篤・永戸千賀「難聴児の構文能力その4—就学前児に対する受動文の指導」日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, pp. 22, 1999.
 - 5) 神常雄『高度難聴児童・生徒に対する統辞機能形成のための実験教育的研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究C2研究成果報告書, pp. 2-30, 1999.
 - 6) 小寺富子・倉井成子・里村愛子・田中真理・佐竹恒夫「言語発達遅滞検査法<試案1>を用いた正常幼児の言語能力の調査」『音声言語医学』第28巻, 第3号, pp. 183-199, 1987.
 - 7) 天野清『幼児の文法能力』東京書籍, 1977.
 - 8) 小寺富子・倉井成子・里村愛子・田中真理・佐竹恒夫「言語発達遅滞検査法<試案2>」『音声言語医学』第30巻, 3号, pp. 263-276, 1989.